

地方中核都市の長期ビジョンに関する提言 ～静岡市をモデルとして～

静岡県立大学グローバル地域センター・サロン

I.はじめに

今後、少子化、高齢化とともに、静岡県経済は衰退する可能性が大きい。これを防ぐために、雇用の拡大や、新産業の育成を図り、また停滞した社会でも充実した生き方を可能にする条件は何かを検討するため、2013年度から、アジア、経済、国際化の3つのサロンを設け、それぞれ7～8回の会合を重ね検討した。

II、地方中核都市としての重要性

日本は、経済を効率化し、また予想される大地震などの自然災害に対する抵抗力を強めるため、首都圏で過密になった人口や企業本社を地方中核都市へ移転する必要がある。それに対応して、地方では人口と経済を中核都市に集中させて、女性や高齢者が働き易く、また老後にも安心して生活を送れるコンパクト・シティを創造しなければならない。

つぎに、成長産業は、観光資源、情報・通信、医療・介護、有機農業であるから、地方の中核都市では、そのインフラを充実することが重要な課題である。そうした努力を重ねれば、将来、首都圏から新幹線で一時間程度の地

域で、それぞれ特色ある産業を持つコンパクト・シティが重層的に発展するだろう。

そうした観点から、静岡市の将来を展望すると、「東京から程よい距離にあり、特色あるコンパクト・シティを創造できる」。そのあるべき姿をイメージすると、つぎのようになる。

1、コンパクト・シティの特色

a、中心部に、官庁、多様なサービス業、学生や大学職員、住民が集中している。

b、住民は職住が近接し、保育園や老いた両親の住宅が徒歩で行ける範囲に存在し、ケア・サービス・ステーションが最適な距離に立地している。

c、留学生や外国人も中心部に住む。

2、情報・サロン都市

a、中心部では多様なサロンが生まれ、そこでは、最新情報や異分野の情報交流し、文化・学問のレベルが向上する。

b、産学官の交流が深まり、ベンチャー・キャピタルやベンチャー・ビジネスを生む基盤が形成される。

c、新しい文化的な地域コミュニティが生まれる。

3, 都市環境

- a、緑地と水の流れ（伏流水等）が豊富で、景観が優れた都市にする。
- b、自動車を中心部から排除し、道路を生活空間に変える。
- c、公共の建造物は、地域住民と共同利用する。

4, 伝統文化と新しい文化

- a、栄西以来の茶文化、朝鮮通信使、徳川家康の新外交等の歴史の連続性を考え、現在を捉え、文化に生かす。
- b、20年間ぐらいの計画で小中学生から特色ある文化を育てる。

Ⅲ、具体的提案

1, 文化都市の形成

a、コンパクト・シティー

夜間から早朝を除き中心部への車の乗り入れを禁止する。歩道の幅を広げ、自転車専用道路をさらに増やす。

中心街に病院、高度な教育機関、保育園、レストラン、小売店などと住宅を集中させる。徒歩圏内で、誰でも生計を営める。高齢者、勤労者、若者にとって暮らしやすく、安心な人生を送れる。それには、住宅の流通と住宅改造業の発展が必要であり、自治体の補助金制度が有効である。

b、緑豊かな景観都市

樹木や花壇を多くし、ベンチを増やし、広告看板を規制し、統一した町並みと富士山の景観を楽しめる都市にする。住民は美しい都市造りに参加する。

c、留学生が多い国際都市

コンパクト・シティーは、(イ) 県立大学周辺と(ロ) 県庁周辺の2つから成り立つ。

(イ) 県立大学周辺は、大学と、学生寮、教員や市民の住宅、保育園、劇場、美術館、レストラン、座談ができる喫茶店等を一体とした文化的住宅地域になる。

教員、研究者、大学院生を含む学生が近くで生活すると、刺激し合い、研究が深まる。学生寮は、留学生と日本人が一体になって住み、日本人の国際感覚が磨かれ、また、留学生の日本文化への理解が育まれる。

留学生が日本で就職できない理由の1つは、日本語が充分話せないことである。大学では、日本語教育が重要である。県や市町がアジアの各国の中学・高校に日本語講座を寄付し、優秀な学生を静岡に留学させるという制度が必要である。

留学生は県内企業の長期のインターンシップに参加し、在学中に本社員の長期雇用・年功賃金など、日本的経営に理解を深める。

(ロ) 県庁周辺は、多様なサロンが開催され、将来のビジョンが議論され

る文化的地域であり、同時に自動車乗り入れ禁止の住居とサービス・商業地域でもある。芝生や緑が広がり、住民は公共施設を生活のために広く利用する。

d、文化人サロンの都市

本県には、人文科学、自然科学、芸術などの分野で、国際的にトップクラスの学者が揃っているが、その多くは、東京を情報の発信・吸収の拠点として活動している。文化人が進んで静岡のサロンに加わり、情報を静岡から発信できるような環境を整える必要がある。

2、ベンチャー企業の成長

a、新技術に関する情報交流

日本では、新技術は主として大企業や中堅企業で開発される。そういう事情を考慮し、県下の企業の研究者（客員研究員）や大学の研究員が、最新技術情報を交流して、起業意欲をもつ学生や人材に刺激を与え、また金融機関は技術情報を蓄積してベンチャー企業の成長を金融的に支えるべきである。また、企業が研究所を設置しやすいような条件を整えることが重要である。

b、起業経験者による支援

ベンチャー企業に、成功した起業家OBなどが、ノウハウを伝えるシステムを整備すべきである。

c、静岡地域には農業、食品、介護、医療、観光など、成長可能性ある分

野が多い。関係者の人的ネットワークの広さが重要であり、そのためにサロンが役立つ。なお、浜松は、多数の世界的な企業が生まれた国際的に最も優れたベンチャー企業都市であった。

3、伝統文化や歴史の活用

a、伝統文化の継承・創造（お茶）

高級和菓子、街に滲み出る茶の香り、茶室のような話しやすい空間からなるお茶文化が、中心街に溢れるようにする。新しい茶の楽しみ方の開発も重要であり、最近、茶葉と薄底容器の色彩を楽しみながら氷で飲むという方法も生まれた。

b、文化教育

芸術を育てるためには、幼い時から親しむことが重要である。金沢や松江の伝統芸能は多くの住民が習うことによって維持され、松本市のクラシックは、数十年前からの幼児教育によって実ったもので、参考事例となる。

c、歴史の再発見

静岡市には、今川氏、徳川氏の文化や政治の歴史があり、朝鮮通信使のような外交の歴史もある。豊かな観光資源を、お茶や食の文化と融合させる努力が必要である。